

人やりの道ならなくに大かたはいきうしとい、ていさかへりなむ

といふ歌をよみし由見へたり此さねが湯治せし湯つくしとばかりありて、いづれの温泉のこと、もさだかならずつくしといへば、さすところ甚ひろし、今九州の温泉ある所甚多し、左すればいづれの温泉のこと、も極めがたけれ共、釋の蓮禪が、はるく、と武藏の温泉に浴せしを以て類推すれば、さねが湯治せし温泉も武藏なるべし、

一その所の人のい、つたへには、いにしへ將軍虎麻呂といふ人あり、その女疾ありていゑがたかりしに、此温泉に浴せしかば、その疾すなはち平癒せり、故に虎麻呂その湯を經營し、取建しよりこのかた、今にいたるまで浴者絶へずといへり、虎麻呂の本宅は、古賀村の内すだれと云所にありしとかや、今も其宅の跡あり、又温泉の近邊に、虎麻呂建立の薬師堂あり、椿花山武藏寺と號す、その寺の側に、虎麻呂の墓あり、元來虎麻呂といふ人、正史舊記にその事跡見あたらぬ人ゆへに、いつの比の人にや分明ならざれ共、此武藏寺を建立せし人なれば、はるかにふるき世の人と見へたり、

〔古今和歌集八離別〕源のさねが、つくし。へ湯あみんとて罷りける時に、山崎にて別れ惜みける所に、てよめる、

命だに心になふものならば何か別れのかなしからまし

○按ズルニ、此ニつくしトノミアリテ、其温泉ノ名ヲ言ハザレドモ、當時筑紫ノ湯トアルハ、皆今ノ武藏温泉ヲ指セルモノ、如シ、依テ此ニ收ム、

〔本朝無題詩七〕著長門壇郎事

同人〇蓮禪釋

浪驛涉旬猶泛然、愁中有興綴詩篇、隣船礎日引麻布、類船之中、有三小坏、以疎布爲單、里社祈風供木

綿、遠岸有一社、當州稱二宮、於舟中、而夜憶遐鄉纔入夢、晴望孤島小於拳、一尋西府温泉地、治病逗留